藤原宮
大極殿院の調査

飛鳥藤原第 205 次調査　現地見学会資料

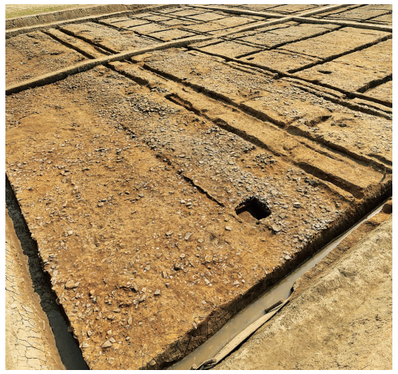
（独）国立文化財機構奈良文化財研究所　都城発掘調査部

調査区周辺の様子（北から）
※大極殿院から南方を望む

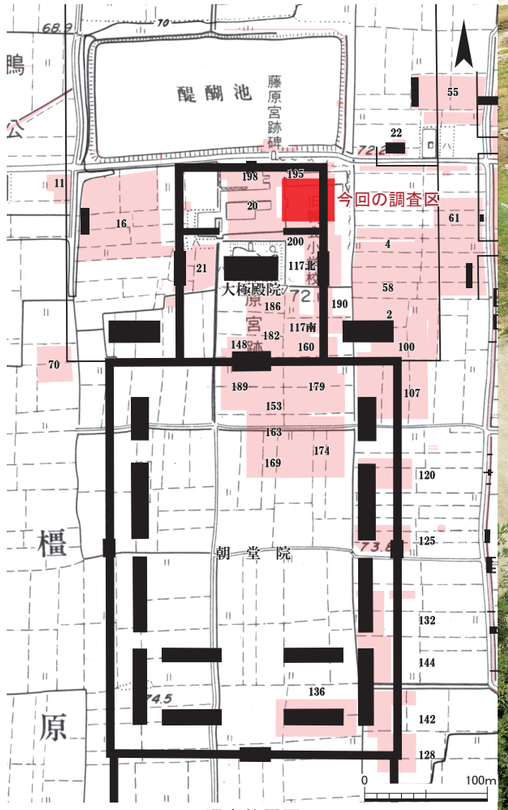
東面回廊検出状況（北から）
※棟通りと東側柱通りの礎石据付穴がよく残る

礎石据付穴と礎石移動痕跡（南西から）
※瓦堆積の上面に橙褐色土が堆積する

礎石据付穴（北から）
※拳大の礫を根石として詰める



東面回廊付近の瓦堆積（北東から）
※回廊基壇を中心に多量の瓦が堆積する



調査位置図
※調査地は大極殿院東北部

東面回廊から大極殿、畝傍山を望む
（北東から）
2020 年 9 月 24 日撮影

藤原宮 大極殿院の調査
（飛鳥藤原第 205 次調査現地見学会資料）
2020.11.7

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部
〒 634-0025 奈良県橿原市木之本町 94-1　https://www.nabunken.go.jp
Edited by T.Suzuki・M.Kuriyama

藤原宮大極殿院東面回廊および内庭東北部を調査し、回廊の柱位置や先行四条条間路の側溝などを確認しました。今回の調査により、大極殿院回廊東半部のほぼ全域の調査を終え、回廊の柱配置や造営から廃絶に至る経緯を明らかにすることができました。大極殿院東面回廊および内庭東北部の様相が解明されたことは、藤原宮大極殿院の構造および古代宮都の今後の調査研究に関して、重要な成果です。

大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、その中央には即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿があります。大極殿院の調査は、1934 年の日本古文化研究所による調査に始まり、1977 年以降は奈良文化財研究所が継続的に進めてきました。これらの調査により、回廊は礎石建ち、瓦葺きの複廊で四面には門が開くことが判明しています。2019 年度の調査では、東面回廊に取付く大極殿後方東回廊を発見しました。今回は大極殿院東北部の東面回廊および内庭を調査しました。

東面回廊　礎石建ち、瓦葺きの複廊形式の回廊で、基壇は橙褐色粘質土を版築状に積み上げて造成しています。棟通りおよび東側柱通りにおいて、桁行 7 間分、礎石据付穴 16 基をあらたに検出しました。柱間寸法は、桁行 3.8 ～ 4.0 m（13.0 ～ 13.5 尺）、梁行約 2.9 m（10 尺）です。

今回の調査により、東面回廊のうち、大極殿後方東回廊と北面回廊の間は桁行総長約 47.1 m、12 間であることが明らかになりました。当該部分の桁行寸法は 13.5 尺を基本とし、大極殿後方東回廊より南方の東面回廊が、約 4.1 m（14 尺）を基本としているのと異なります。

内庭　大極殿院内庭では、直径3～ 15㎝大の礫を敷いていることを確認しました。

回廊基壇裾の南北溝　回廊基壇の東西で、南北溝１・２を検出しました。回廊基壇造成時に掘られた溝です。

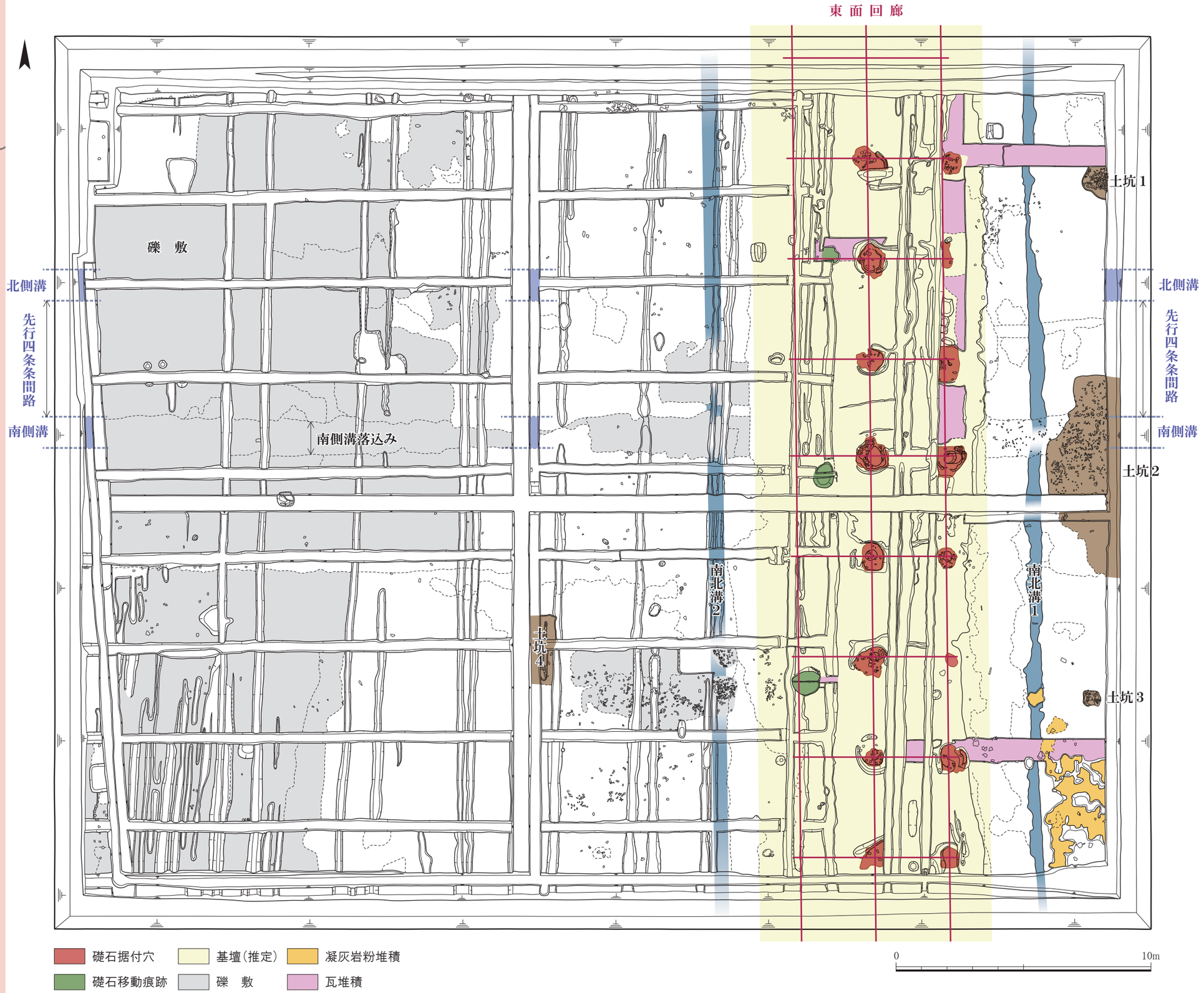
宮造営時の土坑　東面回廊東方で土坑１・２・３を検出しました。埋土に瓦を多く含みます。

先行四条条間路　調査区の北部を東西に通る道路です。北側溝と南側溝を検出しました。藤原京の条坊道路が藤原宮造営以前に施工されていることを示しています。

宮廃絶後の瓦堆積　東面回廊基壇を中心に、多量の瓦が堆積する状況を確認しました。

礎石移動痕跡　東面回廊棟通りの1.5～2.0ｍ西方において、前述の瓦堆積の上面に、基壇土由来と考えられる橙褐色土が堆積し、その表面に花崗岩粉が固着している状況を３か所で確認しました。基壇が削平され、その上面に瓦が堆積した段階においても、回廊の礎石のうち、いくつかが当初位置に残っており、後に、それらの礎石を移動させた場所を示す痕跡と考えられます。

宮廃絶後の土坑　調査区の中央部において土坑４を検出しました。埋土に瓦などを含みます。



飛鳥藤原第205次調査遺構平面図